2018 年度　傾斜的研究費（部局長裁量経費）看護学科　成果報告書

看護教育・研究の国際化推進と人材育成

首都大学東京　健康福祉学部　看護学科

2019 年 3 月

海外研究者特別招聘

2019 年 2 月 6 日、看護科学域では、日本の看護大学を卒業後、米国で修士・博士の学位を取得し、現在コロラド州の２つの病院で緩和ケアの CNS およびナースサイエンティストとして活躍されている朝倉由紀氏を招聘し、「米国における CNS の実践」をテーマに講演会を開催した。本学教員、大学院生、認定看護師養成課程研修生らの参加者からは活発な質問があり、米国の看護教育の方法、CNS や DNP、ナースサイエンティストといった種々の高度実践看護師の役割などについて理解を深めることができた。

Dr. Yuki Asakura,
Clinical Nurse Specialist,
Nurse Scientist

講演の概要

米国では、フリップド・クラスルーム（反転授業）が採用され、学生は講義に相当する部分を自宅で学習し、授業ではその知識を基盤として発展的なプロジェクトを行う能動的な看護教育を行っている。

臨床での看護の質は、NDNQI（the National Database of Nursing Quality Indicators）や HCAHPS（the Hospital Consumer Assessment of Healthcare Providers and Systems）を用いて評価される。

米国の医療モデルが paternalism から informed consent へ、さらに shared decision making へと移行する中、CNS は全人的ケアを提供することが求められている。緩和ケアチームは患者・家族・意思決定代理人とコミュニケーションを取り、彼らの望むケアゴール、たとえば「苦痛の緩和・延命・完治」のどれを最も優先したいかを話し合いを通して明らかにする。そして、CNS はそのための支援を行う。

Nurse Scientist とは、病院における EBP（Evidence Based Practice）を推進するための臨床研究を行うことを役割とした看護師を指し、多職種から成る研究チームで活動している。CNS らの活動が患者だけでなく病院の利益となっていることを経営者にデータで示していくことが、緩和ケアプログラムの発展に繋がる重要な仕事である。

Ⅱ．学術国際交流の推進（研究 1）3.　英語による講義や論文作成の研修会

国際化に向けた教員と学生のための英語研修

島田　恵、坂井志織

1. 目的

英語による講義や研究発表のために、教員と学生の語学能力の向上をめざすことを目的とする。

2. 方法

英語研修を企画・運営する。平成 30 年度に開催した英語ワークショップの日程などは、以下のとおりである。

日時・場所	内容
7 月 30 日（水） 18:00～21:00 場所： 成人看護実習室	第 1 回アカデミックライティング～基本編～ 講師：早野 ZITO 真佐子 参加者：計 18 名 （院生 11 名（前期課程 8 名、後期課程 3 名）、学部 4 年生 1 名、修了生 2 名、教員 4 名） 【事前課題】 ①英語文献 3 部の見出し、小見出しなどを確認して、どのような構成になっているか、そこにどのような単語が使われているのかを中心に、気づいたことを書留める。 ②Effort-Reward Imbalance and Burnout Among ICU Nursing Staff の論文に目を通し、内容を把握する。
8 月 6 日（水） 18:00～21:00 場所： 成人看護実習室	第 2 回アカデミックライティング～基本編～ 講師：早野 ZITO 真佐子 参加者：7 名（院生（前期課程）4 名、教員 3 名） ＊うち 2 回とも出席は 2 名 【事前課題】 ①自分の論文、小論文、レポートなど、日本語でこれまでに書いたものの中から、英訳してみたい部分 1 パラグラフを選び持参する。

※第 3 回（別講師）も予定していたが、日程調整がうまくいかず中止となった。

3.ワークショップの状況

第１回は、講師よりパワーポイントを使って日本人が間違えやすい文章の書き方について、具体例を示しながら講義された。その講義をもとに、実際の英語文献３部について、書き方の注意点を質疑応答形式で学習した。

第２回は、1回目に学習したことをもとに、受講者各自が書いた文章の校正を試みた。その後、講師が修正案を提示し、その理由や違いなどを解説された。講義の中で、早野先生ご自身がどのように英語能力を磨いていらしたかもお話され、言葉が身体化されるには地道な努力が不可欠であることが伝わってきた。受講生からは、講義が日本語であったことから、理解が深まったという声が多く聞かれた。

４．今後の課題

・大学院博士前期課程の科目の一環で出席を課したため、修士 1 年生の出席が多かった。内容的にも英語で文章、論文を書く際に犯しやすい間違いを中心に日本語で教えていただき、実践的であった。来年度からは、大学院の科目内に位置づけて講義いただく予定である。
・国際学会で発表する予定の学部 4 年生や、英語論文を投稿するために abstract を書かなければいけない院生が参加し、実際に英語で書いたものを教材としてみんなで校正を試みるなど、ワークショップ形式で楽しみながら実践的に取り組むことができた。
・修了生の参加もあったことから、大学院生だけでなく学部生や大学院受験を考えている現役看護師など、様々な立場の人が学ぶ機会となるような企画を検討してはどうかと考える。
・ライティングは多読が必要であるため、リーディングの会や、日常的に英語を用いる機会が増えるとまず英語でしゃべることが苦手な者にとっては、プレゼンテーションの前に効果的なトレーニングではないかと考える。

以上

看護研究講習会–質的研究編　開催報告

講師：鈴木智之先生（法政大学社会学部教授）

第1回 2019年2月22日（金）15時30分～17時30分
テーマ：「病気と健康－その視点を問い直す」
参加者：50名

「病い」「健康」とは何かを再検討するための視点として，フランスの哲学者ジョルジュ・カンギレムの著作から「正常と病理」の意味を考える「生物学的規範性」についてご教授頂いた．その上で，「正常と病理」の定義では掬い取ることができない病いの意味について，カンギレムの理論的継承者の一人であるクレール・マランの論考「破局的なもの」についてもご教授頂いた．

第2回　2019年3月 8日（金）16時～18時
テーマ：「病いとともにある人々の『生活史』の語り」
参加者：50名

第2回では，病いの経験を個人の生活史のなかで聴き取るという作業がどのような意味をもっているのか，「病いの時間性」「語り」「ライフストーリー」という考え方をご教授頂いた．さらに，知の探究の仕方として，集合的なレベルで見えてくる規則性の記述と，個別的な事例の記述の違いをご説明頂いた上で，先天性心疾患とともに生きる人々の生活史を例示しながら，他者の経験の「分有」の仕方についてご教授頂いた．

看護研究講習会担当：山本・菱沼・坂井

看護研究講習会-量的研究編　開催報告

講師：竹内文乃先生（慶応義塾大学医学部公衆衛生学　専任講師）

第1回　2019年2月28日（木）14時～16時
テーマ：「続：卒研指導に役立つ統計解析」
参加者：25名

主に教員を対象に、取り扱うデータの種類に応じた統計解析手法について概説いただいた。また、これから研究に着手する大学院生も出席していたことから、研究デザインやリサーチクエスチョン、サンプルサイズ、変数測定方法、解析計画等を事前に綿密かつ明確に立案しておくことの重要性を力説いただいた。図表・グラフにより視覚的な理解が促され、「わかりやすかった」「根本的に理解できた」といった声が多かった。

第2回　2019年3月5日（火）14時～16時
テーマ：「続：卒研指導に役立つ統計解析（つづき）」
参加者：23名

リクエストにより、主成分分析、因子分析、共分散構造分析、クラスター分析、判別分析、PLS回帰分析について概説いただいた。特に、いくつかの看護系学術論文を例に、これらの統計手法がどのように活用されているかをわかりやすく紹介いただいたことで、「もっと個別に相談してみたい」「自分の研究計画でもディスカッションしたい」という大学院生の声も複数寄せられた。また、「統計的有意性」や「p値」が意味することに関する近年の見解を、その他の統計的推測方法・今後の動向と併せて紹介いただいた。

看護研究講習会担当：山本・菱沼・坂井

＜個別研究＞

看護大学生における乳幼児との交流経験と養護性および次世代育成力に関する研究
—1 年後の変化

Nurturance and next generation nurturing capability: Effects of nursing college students' interacting experience with infants—changes in one year

園部真美（Mami Sonobe）　木村千里（Chisato Kimura）

研究成果の概要（和文）

2017 年度に引き続き、看護大学生 2～4 年生を対象に質問紙調査を行った。質問紙調査の内容は、属性、乳幼児との交流経験、養護性尺度、次世代育成力、先行研究をもとに独自に作成した育児支援に関する学びに関して尋ねた。「経験なし群」、「経験変化群」、「経験あり群」と 3 つに分け 2018 年度の得点から 2017 年度の得点を引いて平均改善度を求め t 検定を行った。1 要因 3 水準の分散分析を用いて、群ごとに各尺度得点が 1 年間でどのように変化するかを検討した。その結果、育児支援についての学びにおいて、学年や群に関わらず多くの側面で向上が見られた。また 3 年生では、経験変化群が他の群に比べて、養護性尺度の「共感性」「技能」、次世代育成力の「継承」、学びの「全般的支援」「子どもの扱い」でより大きく得点が向上していた。4 年生ではそうした経験変化群の優位性は見られなかった。

研究成果の概要（英文）

In 2017, nursing college students in the second and third undergraduate years participated in a questionnaire survey. They also participated in the same survey in 2018 (in their third and fourth years). The questionnaire consisted of Nurturance Scale, Next-generation Nurturing Capability Scale, and a scale addressing learning of childcare support. It also asked experience of interacting with infants. Based on the experience, participants were classified into "not experienced", "become experienced", or "experienced". For each subscale, improvement score was calculated by subtracting score in 2017 from score in 2018. Mean improvement score of each experience group was t-tested against zero. And the scores of three experience groups were compared by ANOVA. Students in both academic years improved their learning about childcare support in many aspects regardless of interacting experience. Interacting experience in 2nd year enhanced improvements in “empathy” and “skill” of nurturance, "inheritance" of next-generation nurturing capability, and learning about "general support" and "handling child".

主な発表論文等

Mami Sonobe, Chisato Kimura, Takahide Omori, Masami Usui: Nurturance and next generation nurturing capability: Effects of nursing college students' contact experience with infants—changes in one year. Advancing the Life Sciences &Public Health Awareness 2019